

ホセア書 5章15－6章6節

ローマの信徒への手紙 4章13－18節

マタイによる福音書 9章9－13節

本日から聖霊降臨後の節・緑の季節に本格的に入りました。今年はA年ですので、福音書はマタイによる福音書を連続して学びます。また、本日は6月11日ですので本来使徒聖バルナバ日です。ただし、使徒聖バルナバ日は小祝日ですから主日に当たった場合は、次の日となります。明日12日に10時半から使徒聖バルナバ日の聖餐式です。

本日の旧約日課は、福音書の物語の中でイエス様が引用された箇所、「『私が求めるのは慈しみであって、いけにえではない』とはどういう意味か、行って学びなさい」(マタイ6:13)に呼応しています。旧約日課では「私が喜ぶのは慈しみであっていけにえではない。神を知ることであって焼き尽くすいけにえではない」(ホセア6:6)ですが、本日はこの文を中心に学びます。

イエス様が引用されたのは、前半部分だけですが、それは旧約日課とほぼ一致しています。引用ですから一致して当たり前と思えますが、『聖書(新約)』における『聖書(旧約)』の引用では決してそうとは言えません。現在の日本語の『聖書』の旧約部分は、ヘブライ語からの翻訳ですが、最初期の教会は、当時のギリシア語訳を用いていたからです。それゆえ少し訳が異なることが多いのです。しかし、本日の箇所では、イエス様の引用箇所のギリシア語訳の部分を訳してみますと、「なぜならば、わたしが求めるのは、いけにえよりもいつくしみ」となり、こちらの方が異なっています。この現象は、イエス様が実際にヘブライ語聖書から引用し、それがギリシア語の表現に残ったとも推測できます。また『聖書(旧約)』(ことに「律法」を)大切にすマタイによる福音書が、ヘブライ語の『聖書(旧約)』にこだわった結果であるのかもしれない。

また、「『私が求めるのは慈しみであって、いけにえではない』」には、別訳があり、「慈しみ」が「憐れみ」となっています。ここは、「新共同訳聖書」では、「わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない」となっていました。前の前の口語訳でも「わたしが好むのは、あわれみであって、いけにえではない」になっていました。「慈しみ、憐れみ」と訳されている言葉の辞書的意味の第一は、「憐れみ」です。わたしたちが礼拝で唱える「キリエ、エレイソン」(主よ憐れんでください)の「エレイソン」という動詞の部分(憐れんでください)の名詞の形です。その意味では、「憐れみ、あわれみ」の方が正しいといえるのですが、先に述べましたイエス様が引用したであろう『聖書(旧約)』のその部分の言葉は、「慈しみ」です。その言葉は主なる神様の「愛、慈しみ」の意味で用いられる言葉です。それゆえに、新しい「聖書協会共同訳」では、「慈しみ」ただし別訳「憐れみ」となったのでしょうか。

日本語で「慈しみ」と「憐れみ」はずいぶんと意味内容が異なると思いま

すが、「いけにえ」と比較して、主なる神様が喜ばれるはどちらかという質問の答えと考えれば、同じと言ってもいいのかもしれませんが。ただし、イエス様は、旧約日課「ホセア書」の意味内容を理解してこの箇所語句を選んだわけではないと思います。「ホセア書」のこの箇所は、イスラエルが北イスラエル（エフライム）と南ユダ王国に分裂し、さらに、北イスラエルがアラムと連合して、南ユダ王国を攻撃し、南ユダ王国は、アッシリア帝国に救いを求めるといふ、政治的軍事的対立状態を背景にしています。そして、そのように主なる神様を忘れて政治的軍事的力関係に依存しようとする両者に対して、「エフライムよ、私はあなたに何をなすべきか。ユダよ、あなたに何をなすべきか。あなたがたの慈しみは朝の霧はかなく消える露のようだ。」（ホセア 6：4）と警告を語っている個所です。そしてそれゆえに、「神を知ることであって焼き尽くすいけにえではない」と続いているのです。

イエス様は、「徴税人や罪人が大勢来て」一緒に食事をしている際に、それを批判するファリサイ派に対して、「私が求めるのは慈しみであって、いけにえではない」を学びなさいと語りました。ファリサイ派は、「律法」を通して主なる神様についてよく知っている人たちです。しかし、イエス様が問題としたのは、主なる神様を知っているかどうかではなく、知ったうえで何をするのかということです。それゆえイエス様は「私が来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである」と続けたのです。これは、現代の教会論と結びつけるのならば、教会が何のためにあるかという宣教論と関係します。つまり、教会は自分たちの救いのためだけにあるか、他の人の救いの模範となるためにあるかということです。

マタイによる福音書が描く教会像は、自分たちは信仰に入ったので、救われた状態にあると安定を語るものではありません。むしろ、自分たちは教会であるからこそ、律法をユダヤ教徒以上に実践し、この世界で主なる神様の救いの模範を示すことに懸命でした。二千年の歴史を振り返れば、教会は、けっして救いの模範とは言えない歩みをしてきていまし、今もしているといえます。しかし、マタイによる福音書を通して、イエス様が、今も教会がこの世界で主なる神様の救いの模範となれと求めていることは、変わらないと思います。それゆえに、教会が様々な意味で救いの模範といえる歩みをするとき、世界も平和に近づくのです。もし、主なる神様の「愛や慈しみ」以外を用いて世界が平和になる歩みがあるならば、それもいいかもしれません。しかし、その歩みにたくさんの「いけにえ」が必要となるのであれば、正しい歩みとは言えないでしょう。

教会の歩みは、二千年が経過してもまだ途上です。それゆえに、わたしたちの使命は終わりません。だからこそ、日々祈りながら、今日か身を守り続けていきたいと思えます。この世界で模範であることとは何か、その問いに対する答えを引き出すことは難しいかもしれません。その具体化もさらに困難でしょう。しかし、だからこそ、イエス様ご自身、「私が求めるのは慈しみであって、いけにえではない」というみ言葉を引用されたのであり、それはわたしたちが歩むうえで大切な道標に他ならないと思えます。